

河北新報「持論時論」投稿原稿

平成 24 年 3 月 27 日

〒 981-0952 宮城県仙台市青葉区 \* \* \* \*

高橋 覚 56 歳 男 教員 022-\*\*\*-\*\*\* (090\*\*\*\*\*)

ボランティア行動学

中学校高等学校教員 高橋 覚

勤めている学校で数年前に新たにボランティア同好会を作らせてもらった。何年も前からホームレス自立支援炊き出しボランティアに生徒を誘って参加していたのを、少し本格的な活動にできないかと考えたからである。

それが定着してから、3年間炊き出しに関わった生徒に変化が認められた。こわい、汚い、という思いをホームレスに対してもつことが多いのは、何も生徒に限らず一般である。

そのイメージは駅の出入り口や階段での、通りがかりの出会いによる。

だから参加生徒たちは、初回の炊き出し参加の時にまずそれぞれにショックを受ける。その中身はさまざまである。公園に並ぶおじさんたちの数の多さにショック。準備中次に何をしたらよいのか聞けずにただおろおろしていた自分にショック。おじさんたちのきれいな身なりにまたショック。女性の方が混じているのを見てショック。それはそれは、とても忙しい。参加後の報告書にはそんなことがたくさん書かれている。

それがしだいに変わってゆく。本人にとっては新しいことばかりがいっぱいである。それに慣れてきた頃から次に何をすればよいか自分で判断するようになってゆく。分からなければ周囲の人に聞く。参加の回数が増す毎に、公園の並んでいる人たちからの「ありがとう」「おいしいよ」の言葉が忘れられなくなる。周囲の中で自分が何をすべきなのか判断する。

はじめて会った人たちと協力し合ってものを  
作り上げる。公園に並ぶ身ぎれいな方たちと  
接して「社会」にふれる。それらから生徒た  
ちの学ぶものは限りない。

炊き出しボランティア体験を通して、生徒  
は「自分の普段の生活のありがたさ」を口に  
するようになる。それが震災とは別の体験の  
中であつた。

体験が自分の中からことばを押し出す。私  
はそう信じている。体験を積むことにより、  
ことばに磨きがかかる。ことばが本物になる。  
根づくことばになる。自信になる。個人の人  
生の思考回路に組み込まれる。生徒でいえば、  
へトへトになって自分を知り社会を知る体験  
が前へ進む時の進路力をうむ。

もう一つ今年のボランティアの柱として、  
生徒たちと募金活動をほぼ一年間おこなった。  
5月6月。10月11月。2月と3月の末。

募金のお金を、震災で親を亡くした子供た  
ちのために使ってもらおうということではじ

めた。これも苦行であった。雨の日、寒い日が多いたためもあったが、ノルマで決めた2時間半は足を棒にした。グループに分かれて街に立ったので、顧問の私はグッチビル前―フォラス前―三越前を自転車で回った。

街の様子に、偽りはない。街の雰囲気や状態が直接飛び込んでくる。生徒はそれを受けとめる。十代の声をからした訴え。出会いとふれあい。季節の変化はあっても、ここでも生徒たちはうらやましいほどに、街の方たちから応援を受けた。何と幸せなことであろう。ヘトヘトで終了するのに、興奮で顔が上気している。

募金活動がはじめてだった生徒たちが次の感想を書きつけた。「募金活動をやった時、はじめてお金の大切さや重みを改めて学ぶことができました。」「人のためにやっている募金だったはずが、自分が多くを学ぶ活動になっていました」「ボランティアの活動は、誰かのために活動した内容以上に自分自身が成長

するため、よい経験になると思います。「3  
年間続けてきてよかったため、これから自信  
を持って行けると思いました。」（報告書）

この世代がふるさとの復興のために、中心  
の担い手となるのは間違いないだろう。私た  
ちにはその世代に関わる責任がある。

二つの体験を通して押し出された自分のこ  
とを、信じて進んでほしいと願っている。それ  
は間違いのないことばなのだから。